

大西さんには、僕が大学院生の頃から基研のスタッフの同僚として活動するまで、いろいろ面倒を見て頂き大変お世話になりました。

最初に大西さんと出会ったのは、僕が M2 か D1 のとき、RCNP で開催された研究会だったと記憶しています。この研究会の懇親会後に、飲み足りなかった人々を中心に二次会が企画され、RCNP 旧宿舎の大部屋で飲み会が始まりました。昼部屋で、参加者の半分以上は宿舎の寝巻浴衣といった雰囲気だったと思いますが、浴衣の裾もはだけんばかりに話に熱中する大西さんと楽しくお話しさせて頂き、一気に親しみやすくなったことをよく覚えています。

この研究会で、大西さんから重イオン衝突実験における HBT 相関測定のことを教えて頂いたことも大きな収穫でした。これを受けて、僕が当時所属していた京大核理論研究室では HBT の勉強会が始まり、また北大の学生だった一瀬さんの長期訪問を受け入れるなどして、研究室ぐるみで交流させて頂きました。当時の僕には HBT は難解で、残念ながら共同の論文には至りませんでした、とても良い経験になりました。

その後約 15 年を経て、大西さんの HBT 研究はフェムトスコープと名を変えて世界的ブームの火付け役になります。後から振り返ると、大西さんがこの研究構想を流行の遙か前から温めておられたことを思い知り、当時その源流に触れられたことを嬉しく思うと共に、大西さんの構想を受け止められなかった己の未熟さを無念に思います。なおフェムトスコープについては、大西さんが亡くなったあと大西さんの研究業績を調べていた際に、1998 年頃の研究会紀要に原案となるアイデアがまとめられているのを「発見」し、当時のことや、すぐに日の目を見ずとも研究のアイデアを温めておくことの重要さなど、いろいろなことに思いを馳せました。

僕が 2007 年に阪大のスタッフになった後も、大西さんにはいろいろと気に掛けて頂きました。特に大西さんが京大基研に着任されてからは、地理的な近さもあり、様々な運營業務等を大西さんに振って頂きました。学会の各種委員や研究会の運営の補助もありますし、原子核三者若手夏の学校の講師の依頼が来て、依頼をしてきた学生になぜ僕を選んだのか尋ねたら大西さんの差し金だったということもありました。こうして回して頂いた諸活動を通して研究者として成長できましたし、研究分野全体の活性化に貢献するという広い視点を植え付けて頂きましたので、大変感謝しています。

これらの諸業務は、基本的にお祭り好きな僕としては歓迎すべきものでしたが、やるが増えると研究時間が圧迫されるのも事実です。それで、一度何かの拍子に、「大西さんは僕に仕事を回しすぎです。勘弁してください。」というような文句を大西さんに言ってしまったことがあり、後になって後悔したことを覚えています。しんどいのは確かですが、何もやることがなければ寂しくてたまらないためです。そのあと大西さんに直接謝って訂正したか、しなかったか記憶が定かではありませんが、いずれにしても、その後も大西さんとの関係はあまり変わらず、それまで通り仲良くして頂いて安堵しました。こうしたやりとりの中で、研究者として打ち込むべき仕事があることの喜びを教えて頂きました。

大西さんは、いろいろな意味で僕が目指す研究者像を実践されている方で、僕にとっては常に目標とする研究者の一人でした。研究分野が近いこともありますが、実験研究者との連携を意識し、実験データと真摯に向き合うこと、またときには大規模シミュレーションも行うことなど、僕自身がやろうとしていることは、いつも大西さんに先に行われていました。それでいて、大西さんはストレンジ核物理など僕が不勉強の分野で圧倒的な見識を持っておられ、研究会や議論等の場ではいつも圧倒されていました。そのような大西さんの見識を少しでも盗みたいと常日頃から思っていたので、2022年に京大基研のスタッフとして拾って頂いたのは大変ありがたかったです。結果的に、僕が元気な大西さんと間近で議論できたのは半年足らずになってしまったことが悔やまれますが、それでもその間に、符号問題の解決法やハドロン輸送模型を使った研究などで興味深い議論ができ、重要なヒントが得られました。クリスマスも過ぎた2022年の年末、互いに慌ただしい時期に大西さんの部屋で議論に熱中したことはよい思い出です。これらの議論はいずれ論文にまとめて大西さんに報いたいと思います。

阪大時代に大西さんに回して頂いた業務のうち、現状未完の大仕事の一つに、J-PARC 重イオン衝突実験計画があります。我が国の加速器 J-PARC に重イオン入射器を接続し、高密度核物質探索などの実験を行うことを目指す将来構想です。大西さんの提案で、僕はこの計画推進に理論研究者として加わっています。これは、分野の見識という意味では本来なら大西さんが担うべき役割で、実際最初は大西さんに実験グループから声が掛かったと聞いていますが、より若い人に任せるのがよからうという大西さんの判断で2014年頃に僕を指名して頂きました。それから約10年、僕の力不足もあって計画は未だ道半ばで、大西さんという大きな後ろ盾を失ってしまったことはこの計画にとって多大なる損失でしたが、この計画を実現し、大西さんが描いた高密度核物質相構造の物理を我が国で推進し、いつか天国の大西さんにより報告ができるよう、この活動を続けていきたいと思います。

北沢 正清 (京都大学基礎物理学研究所)